Bulletin of the Faculty of Education, Yamaguchi University, Vol. 42, Pt. 3

倉橋惣三の幼児教育方法論前史
―1912（明治45）年「森の幼稚園」までに―

桑　原　昭　徳

S. Kurahashi's Prehistory of Methodology in Early Child Education
― Until His "Grove Kindergarten" 1912 (Meiji 45) ―

Akinori KUWAHARA
(Received September 10, 1992)

1．はじめに

1912（明治45）年１月、倉橋は『婦人と子ども』第１号誌上において「森の幼稚園（一）」を発表する。題名中の「（一）」が示すように、以後連続して第６号までに６回ほど連載される。第１回は本文４ページ半ばかりで、６回の全部を合わせても２０ページあまりという小さな作品である。倉橋が２９歳になろうとするときの執筆であると推定できる。この「森の幼稚園」は、そのころ倉橋が理想とした幼稚園のイメージを物語風に表現した作品である。さらに「森の幼稚園」発表の８年後の1920（大正９）年の５月、在外研究途上の米国シカゴの近郊、ドーナー・グローブにおいて倉橋は偶然にも「森の幼稚園(Grove Kindergarten)」に出会うことになる。

「森の幼稚園」を発表した同じ1912年の６月２日には、京阪神三市連合保育会の第１９回総会が神戸で開かれる。その席上、倉橋は「幼児保育の新目標」と題して講演をする。この講演記録は同年第１０号の『婦人と子ども』にも収録されることになるが、1926（大正１５）年の倉橋の最初の単行本『幼稚園雑草』にも収録される。とくに1948（昭和２３）年の新版『幼稚園雑草』の「幼児教育の新目標」の最後尾において、次のことが補筆される。

「これは４０年近い以前に神戸において試みた講演である。幼稚園教育に関する私の最初の講演であるが、今もなおこの考えを捨てない。のみならず、今日もまだ、同じ注意を必要とするところの多くあるのは、我国幼児教育のために遺憾である。著者」（注１）

倉橋も言うように、「幼児保育の新目標」は、倉橋にとっての最初の幼児教育についての講演であったが、同時にその講演は倉橋の幼児教育思想の原点でもある。

作品「森の幼稚園」は虚構の文章の形式で理想の幼稚園の姿を描いたものであり、講演「幼児保育の新目標」は保育現場に生きる実践人を前にした理想の幼稚園のあり方を示したものであった。この両者は、実質的には1908（明治41）年にはじまる『児童研究』および日本児童研究会での倉橋の「心理学的ないしは児童学的研究」が、「幼児の教育学的研究」の性格を帯びていく出発点となる業績である。

時あたかも、この年の７月３０日には、明治は大正へと移りかわる。倉橋の「森の幼稚園」と「幼児保育の新目標」は、明治末の時点における、いわば初期倉橋の保育思想を反映する著述である。同時にその両者における思想は、倉橋の生涯にわたって貫いている保育思想でもあり、原点とも言える。

それでは、大学において心理学を専攻した倉橋が、どのような過程を経て「幼児の教育学的研究」へと傾斜し、深めていったのか。２９歳という年齢で、幼児教育の核心をつく「森の幼稚園」と「幼児教育の新目標」の発想はどこから生まれ、どのように形成されたのか。具体的には「森の幼稚園」と「幼児教育の新目標」の両者が明治末の時点において、どのような過程を経て結実したのかを検討することになる。

本論は、明治末の「森の幼稚園」および「幼児保育の新目標」に至るまでの、いわば倉橋の幼児教育思想前史の検討が目的である。それは同時に、後につづく倉橋の幼児教育方法論を探究するための基礎作業である。

２．「森の幼稚園」の概要

「森の幼稚園」という題のあとにつづく第１節には「森の先生」という見出しが付けられている。読者の目に最初に飛び込むことになる題の「森の幼稚園」にしても、見出しの「森の先生」にしても、その太字の文字自体が、なにやら温かみを感じさせ、読者を空想的な世界へといざない、引き込む力を持っている。

物語は次のような書き出しではじまる。「先生が此の幼稚園を開かれてから、もう大分の歳月になります。入口の楢（なら）の木の門を利用して、小さな標札が懸けてあるけれども、近所では幼稚園の名をいう人はありません。森の幼稚園で通っています。同様に先生の名をいう人もありません。森の先生で通っています。」（注２）この冒頭の部分から終わりにいたるまで先生の名前はもちろんのこと、いつごろの、どこの話かも明らかにされない。

さらに次の段落での「皆さんが△△△の停車場で電車を降りて南へとって二三丁行かれると、もうこの森の頭が見えます」との表現から、この文章が事実にもとづいたドキュメントやレポートではなくて、虚構の文章であることが分かってくる。

森の先生は、かつて大学で教育学を講義された人で、今は郊外に引っ込んで幼稚園を開いておられるという設定である。一貫して「私」の視点から描かれているが、読み進むにつれて「私」が「園芸主任の花田君」であることが明らかとなる。その花田君の目から見た「森の幼稚園」の様子が描かれるのである。

原文は全部で２０数ページの小編であるが、その中で倉橋の理想とする幼稚園のイメージと、その幼稚園での保育や経営の実際を描き出そうとした教育小説である。この「森の幼稚園」を初めて読んだとき、筆者が思わず連想したのはペスタロッチーの教育小説『リーンハルトとゲルトルート』であった。

倉橋のこの小説の中でも「イヴェルダンの学校におけるペスタロッチ」とか、「ブランケンブルクへの道すがら」のフレーベルなどの記述が散りばめられており、２０代の終わりの時点での倉橋のペスタロッチーおよびフレーベルへの関心の強さと研究の跡も垣間見ることができる。

第２節の「ガーデン主義」は「暖かい午後」の場面である。森の先生と一緒に、「私」がフロックスの移植をしている。そんなとき先生は「私」に次のように語りかける。

「ねえ君、温室のように無理強いに咲かすのでもないし、といって勿論、野原のように野生のまま放任して置くのでもなし、自然に成長して、自然に咲くべきものに、適当な培養を与えるのが君の仕事でしょう。――つまり幼稚園なんだねえ」

幼児の教育方法は、強制でもないし、放任でもない。その両極端を避けて、もともと「自然に成長し、自然に咲く」力を内部に秘めている植物に「適当な培養を与える」ことが保育者の仕事であ

り、指導の方法であることを、倉橋は物語中の先生に言わせている。倉橋の幼児教育方法の構造が、この時点で明快に表現されているのである。

先生の言葉「――つまり幼稚園なんだねえ」の部分は、発表当時の『婦人と子ども』においては「――つまり幼稚園は幼稚園なんだねえ」とあり、下線の「園」の字には丸印も付けられている。倉橋のいう「ガーデン主義」が、実を言えばフレーベルの幼稚園(Kindergarten)を念頭に置いて語られていることが明らかとなる。

かつて「私」は先生から「植物培養の要諦」と問われたことがある。私は何気なく「そうですね、いわば自然の手伝いです」と答えた。「すると先生は急にその大きな手で私を抱くようにして『そうです』と言われました」というのである。さらに「我々のしている仕事もやはり同じです」と先生が言われたという。園芸植物を育てることと、幼児を育てることの類似性が語られる。先生（倉橋と読み替えてもよい）のいう「ガーデン主義」の内実である。

園芸主任の花田君は第3節「園芸主任」で次のように語る。

「私は勿論、直接、幼児を保育する役ではありません。しかし幼児教育にかくも大切なる自然物の世話をしているということは、だれにも愉快なことでありますが、まして、この大きな自然の後にいて、こういう仕事をしているということは私には胸の踊る程愉快なことであります。」

ここで、花田主任の仕事を通して、幼児教育という仕事の構造が概観的に語られる。花田主任の仕事は、森の先生や保母のように「直接」幼児を保育する仕事ではない。つまり、直接子どもたちの目の前に現れたり、日常的に幼児たちにかかわる仕事ではないのである。しかし子どもたちが毎日のように出会うことになる自然物、それは同時に幼児教育にとって重要となる自然物であるが、その世話をしているのは花田主任である。花田主任は直接的に子どもたちに接するわけではないが、彼が世話をしている「自然物」が子どもに語りかけ、その自然物に子どもたちが関与してくれるのである。花田主任の姿はもちろんのこと、心持ちも、「自然物」の背後に隠れていて、子どもたちが花田主任の育てた自然物に接していても直接的に花田主任を意識することはない。花田主任と子どもたちの間には「自然物」という中間項があり、その意味において花田主任から子どもたちへの働きかけは間接的であるといってよいのである。つまり、倉橋のいう「間接教育」論の萌芽である。ここで「保育者（花田主任）――自然物――子どもたち」という間接的な三項関係が示されているのである。

倉橋は、すでに1912（明治45）年の時点で保育における間接教育の構造を意識的に表現している。筆者が倉橋の「森の幼稚園」に着目する最大の理由である。

6回にわたる「森の幼稚園」の連載と並行しながら、倉橋は幼児教育学的な内容の著述を集中的に発表する。そして、「森の幼稚園」の連載が終わるころ、倉橋は「幼児保育の新目標」と題して講演をすることになるのである。その講演では、

○神経の健全強健なる子どもにすること、

そのためには、

○酸素の不足する室内の保育をやめ、机の保育（手技手芸の保育）をやめること、

○指先の仕事をやめて、身体全体の筋肉を使う運動をすること、

○だからこそ、戸外保育・野外保育、自然的保育が急務である、と強調する。

以上のような「森の幼稚園」と「幼児保育の新目標」の思想は、どのようなプロセスを経て形成されたのであろうか。

3．「お茶の水の幼稚園」

1882（明治15）年12月28日、倉橋惣三は静岡市に生まれた。

ひところ岡山市で小学校時代を送ったこともあるが、ほとんどを東京府下で過ごした。

東京府立一中に進学する。

1898（明治31）年11月３日、雑誌『児童研究』が創刊される。倉橋、満15歳のときである。この『児童研究』の「発刊の辞」には、新名称としての「児童学」の由来を次のように説明する。つまり、児童心理学の急速な発達により医学上・生物学上・生理学上・解剖学上から研究した結果、心理学という名称に満足することができないので「児童の心身全体に関する研究」としての「児童学」を創出するに至ったというのである。（注３）

『児童研究』は発刊の当初から、のちに東京帝国大学において倉橋の師となる元良勇次郎（もとらゆうじろう）が会長をつとめる日本児童学会の機関誌ともいうべき雑誌である。創刊号には、元良勇次郎が祝辞を寄せている。卒業後は倉橋も日本児童学会の幹事の一人として就任することになる。みずからも外国文献の翻訳、論文執筆、同会主催の講演などを通して『児童研究』誌は彼の最初の活躍の舞台となる。倉橋の回想によれば、「一中の四年生頃から、その当時創刊間もなかった『児童研究』を、よく分かりもしないのに月々購読して喜んでいた」（注４）ということである。

東京府立一中から第一高等学校へ進学する。当時、倉橋は一高の白線帽をかぶったままで「お茶の水の幼稚園」に通ったことを、晩年の『子供讃歌』において回想している。倉橋の回想は「あの、お茶の水の幼稚園へ、ひとりでよく遊びにくる白線帽の青年があった。明治時代のことである。」という書き出しで始まる。倉橋にとって、一高在学中から幼稚園に通っていたという事実は、晩年の回想の第一ページを飾るほどに重い事実であった。

幼稚園を訪れると「すぐ庭の方へまわって、幼児たちのなかに交って遊ぶ」倉橋であった。幼稚園の子どもたちも「おにいちゃんが来た」といって倉橋を迎え、「彼のそばに集まって来ては・・・ひっぱりまわし」、「どっちが相手をするのか、相手をされるのかわからないくらい、なかよしだった」のだと記されている。まず、園庭での遊びが描写される。

その園庭では白チョークで描いた土俵のなかで相撲が始まる。藤の花が咲くころには、子どもたちを抱きあげては手を花まで届かせてやる。子どもたちは次から次へと際限なく抱いてもらいたがる。それに閉口して倉橋は逃げ出す。子どもたちはその後を走って追い回す。いずれの事実も、後年「幼児保育の新目標」において主張される「足、腰、肩というような大きな筋肉の使用」（注５）が彼自身の回想の最初のページに描かれる。

倉橋は「保育室にはあまりはいらなかった」と記している。「その頃の保育は、かなりにきちんきちんとしていたもので、それを邪魔してはならぬと思ったのでもあろう」し、またそのころの保育で実践されていた「フレーベルの恩物や、こまかい折紙細工などは、彼には全くにがてであった」という。ここにも後年の彼の主張である「大きい筋肉の使用」や「戸外での自然的保育」が形象化されている。

教育ロマン「森の幼稚園」へとつながる倉橋の発想や感性の第１の萌芽は、「お茶の水の幼稚園」での子どもたちとの交わりから生まれてくる。倉橋のいう「チャイルヂッシュ（児童性）」（注６）は天性のものであろう。世に「子どもが好きだ」という教師は多い。しかし「子どもが好きであること」は教師となるための必要条件でしかない。その上に、子どもを実際に対象化することが必要である。いや、それを越えて「子どもと共に生きること」ができなくてはならないのである。倉橋は、子どもが好きであるうえに、子どもを対象化することもでき、さらに子どもと共に居

ることまでもが好きであったのだ。若い学生時代の倉橋の「幼稚園通い」から、２０代終わりの時点での「森の幼稚園」までの距離はそんなに遠くはない。

そのころの倉橋は「早くから幼稚園へ遊びにゆくことを好んだ」が、だからといって「フレーベルの幼稚園に対する理会(ママ)や、況んやそれに対する傾倒を以てした訳ではなかった」のである。「フレーベルに導かれたよりも、子どもに導かれた」(注７) のが、彼の幼稚園通いのそもそもの始まりだったのである。

第一高等学校から東京帝国大学文科大学哲学科に進学する。一高時代の幼稚園通いばかりではなくて、角帽をかぶったままで浅草公園にも出かけることもある。そこで、子どもの遊び相手となる。彼のポケットには子どもの喜ぶ献上物も忍ばせてある。しかしそれは、ただ「子供らを喜ばしてやろうという心」ではなくて、彼の場合「子どもと楽しもう」との心もちであった。(注８) 彼は教師として立ち現れたのではなくて、子どもたちの仲間として子どもの中に溶け込んだのであった。

文科大学では元良勇次郎に師事して心理学を専攻した。元良勇次郎は明治１６年、渡米してボストン大学に学んだのち、ジョンズホプキンス大学ではスタンレー・ホールについて心理学を学ぶ。1988（明治21）年７月帰朝して、文科大学の嘱託講師となる。(注９) 翌年、教授となり、さらに文学博士となる。帝国大学に講座制が導入される明治２６年より大正元年まで「心理学・倫理学・論理学第一講座」を担当した。(注10) その時期、倉橋は元良勇次郎に師事することになる。のちに倉橋自身もスタンレー・ホールについての研究を進めることになるが、そのきっかけは恩師・元良勇次郎が米国留学のときに師事したのが、ほかならぬスタンレー・ホールだったのである。

また、スタンレー・ホールの所論は創刊間もない『児童研究』においても翻訳紹介される。倉橋のスタンレー・ホールの所論との最初の出会いは、彼自身の『子供讃歌』によれば「一中の四年生頃から」ということになる。

大学在学中の倉橋の「幼稚園通い」については、かなり世間の評判になったらしい。回想において自分でも語っている。

1901（明治34）年の１月には、雑誌『婦人と子ども』が発行されはじめる。のちの倉橋の研究活動と発表の中心となる雑誌である。

４．「牧場(まきば)の幼稚園（メドウ・キンダーガルテン）」

倉橋は1906（明治39）年に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業するのだが、倉橋自身の回想によれば、在学中の「ある春」に友人の小野と「成田在の三里塚牧場」へ出かける。(注11) みずから「ロマンチストであった」という彼ら二人は、牧場(メドウ)という夢を育てる格好の空間で将来を語り合うことになる。友人の小野は前からの農科志望であり、「大学を出たら牧場をつくる」のだという。さらに牧場の中には「コッテーヂも幾つか建てるよ」という小野の言葉に、倉橋は手に持っていた「ウォルヅォース選集を、草の上へ軽くほうりだして」夢を語り合いはじめる。彼の晩年の回想記『子供讃歌』の中の連載第１回の記述である。

もとより年齢６７歳の時点で執筆された自伝的回想のなかの記述である。４０年以上も前の若き学生時代の回想であるので、時間的順序の誤解や過度の美化の可能性もある。そのまま受け取ることはできないかもしれない。しかし、リアルに語られる会話体の表現の中に「森の幼稚園」の萌芽を読み取ることができる。

小野は牧場の中に「コッテーヂも幾つか建てるよ」という。この言葉に触発されるようにして倉

橋の夢が語られはじめる。二人のロマンチストの会話は次のとおりである。原文には無いが、発話者の名前を記しておく。

倉橋『僕にも、そのそばに幼稚園をつくらせてくれないか』
小野『そりやあいいね』
倉橋『太い丸木の門柱を二本たてて。……牧場の名は何んとする』
小野『さあ。……君の幼稚園は』
倉橋『名前なんか無くたつていいね。一方の門柱にメドウ、一方の門柱にキンダーガルテンと書いておこう』
小野『ハハハハ、それがいいね。間の境は……』
倉橋『そんなものいらないよ。牧場全体が幼稚園の庭なんだもの』
小野『広いよ』
倉橋『いいさ、草一ぱいにね。丘もあり谷もあり……』（注12）

大学の在学中に「幼稚園をつくらせてくれないか」と同級の友に言えるほどに、迷うことなく進路を固め、希望を語る倉橋である。そのうえ「夢の幼稚園」のイメージは具体的である。さらに、『名前なんか無くたつていいね。一方の門柱にメドウ、一方の門柱にキンダーガルテンと書いておこう』との言葉は、本論のゴールとなる1912（明治45）の「森の幼稚園」の書き出しの次の記述と重なる。

「先生が此の幼稚園を開かれてから、もう大分の歳月になります。入口の楢(くぬぎ)の木を門に利用して、小さな標札が懸けてあるけれども、近所では幼稚園の名をいふ人はありません。森の幼稚園で通って居ます。」

倉橋にとって理想の幼稚園は、牧場や林に囲まれた自然の中の幼稚園なのであった。

倉橋は、夢見た幼稚園に「メドウ・キンダーガルテン」という名称を付けている。「牧場(まきば)の幼稚園」と呼んでよいであろう。

meadowとは、一般に草地や草原をさすが、とくに草刈り用や放牧用の草地をいう。さらに「草の生えている未開墾の川辺の低地」だとか、「高地の樹木限界線に近い緑草地帯」の意味もあるという。いずれにしても、ここでいう牧場(meadow)も、牛・馬・羊などを放し飼いにするほどの広さをもった草原である。そこには、わずかに木立もあってよい。キンダーガルテンの言葉どおりに、牧場は十分に「子どもの園」となりうる。

ガーデン（園庭）・牧場・森の３つの言葉は、「子どもの園」にふさわしい共通のイメージを持っている。それらは、ともに鮮やかな緑の空間であり、広さがあり、子どもの生活が展開できる場所である。

大学時代の「夢の幼稚園」は、みずから「メドウ・キンダーガルテン」と名付けられる。のちに理想の幼稚園として文章化される「森の幼稚園」という名称ではない。しかし、倉橋のつぎの言葉、

『そんなもの（間の境のこと）いらないよ。牧場全体が幼稚園の庭なんだもの』
『いいさ、草一ぱいにね。丘もあり谷もあり……』

は、「森の幼稚園」に描かれた風景を彷彿とさせる。

倉橋は『子供讃歌』の第２節の見出しを「メドウ　キンダーガルテン」と名付ける。「森の幼稚

園」の原風景である。

倉橋が「初めてペスタロッチ伝に接したのはこの頃であった。夏休みに「ドカンプ」の『ペスタロッチ伝』の英訳に読みふけった。彼はその後多くのペスタロッチ伝を漁り、その著作を研究した。しかし、この最初のペスタロッチ伝ほど、彼を純な感激に涵(ひた)したことはない。」（注13）

その直後に「その時まだ教育学の学徒でもなく、専門的研究者でもなかったから・・・」という記述がつづく。たしかに倉橋も言うとおり、この時期の彼はまだ「心理学徒」ではあるが、かならずしも「教育学徒」ではなかったのである。だから、「ペスタロッチ伝のとりこ」になり、「ペスタロッチに酔える人」になったが、倉橋がフレーベル伝を読むのはずっと後になってからのこととなる。（注14）

5．『児童研究』誌での活躍

1906（明治39）年、倉橋は東京帝大文科大学哲学科を卒業する。23歳の年である。

『子供讃歌』によれば、「彼は大学を卒業した年の暮一年志願兵として入隊した。その一カ年は児童研究者として空費に似たもの」であった。

しかし、そんな空費に似た日々の中においても、「将校婦人会のために、児童心理に関する講演を命ぜられたことがある」（注15）という。人間の行動が最も限定される軍隊の中においても、自分らしさを持ちつづけようとする倉橋である。子どもをもつ軍人の若い母親たちを前にして、倉橋の語りは好評を博したようである。のちの『児童研究』と、それにひきつづく『婦人と子ども』での執筆や講演での活躍の伏線ともいうべき、倉橋らしい動きである。

1907（明治40）年、軍隊生活より児童研究に復帰した倉橋は、日本児童研究会（会長・元良勇次郎）の幹事の一人として名を連ねるようになる。(注16) しかし、この年の『児童研究』中には倉橋による論文や翻訳などは見られない。

1908（明治41）年、倉橋の児童研究の最初の舞台である『児童研究』誌上での本格的な活躍が始まる。この年の３月25日に発行された『児童研究』第３号の、４月２日の日本児童研究会の月次小集会の「会告」中で、倉橋の講演が予告される。倉橋の講演の題目は「児童の絵画に就て」（注17）である。

この講演の大要は、つづく『児童研究』誌の第４、５号に収録される。（注18）

倉橋は、リュッケン氏の言語発達との対比による絵画能力の発達の筋道を参考にしながら、１．襤塗期、２．位置排列期、３．形象期に区分する。

倉橋の講演「児童の絵画に就て」が予告された同じ号で、倉橋はダーウィンの「幼児の伝記的観察録(A Biographical Sketch of an Infant)」を「滴録」の形式で発表しはじめる。倉橋の題は「ダービン氏の児童観察」である。(注19) この抄訳が倉橋の『児童研究』における最初の仕事となる。

この抄訳は、のちの倉橋自身の解説によれば、『種の起源』の著者として有名なダーウィンによる自分の子どもの誕生直後より３歳にいたるまでの行動観察の記録である。この記録は、ダーウィン自身によって、すでに1840年にはできていたが、彼の著書『情緒の表出(Expression of Emotion)』の資料として、37年後の1877年に初めて発表されることになる。この論文を高く評価する倉橋は、ダーウィンを「児童研究史上の先覚者」ないしは「英国における児童研究の祖」と位置づける。また、ダーウィンのこの「幼児の伝記的観察録」を、「観察的児童研究のクラシック」あるいは「児童表情研究のクラシック」と呼んでいる。（注20）　倉橋の「ダービン氏の児童観察」の本文は誕生直後の新生児の「一般反射運動」に関する記述から始まる。

「最初一週日の間諸種の反射運動すなわち、嚏（くさめ）、吃逆（さくり）、欠（あくび）、伸（のび）、其他哺乳、泣叫の作用は皆完全に行われたり。」

このほかに反射運動としては、足の裏の触覚反応と吸啜反応を挙げ、これらは「反射的もしくは本能的作用」と見なされるべきだと主張する。さらに「音響に対する反応」、「視覚」、「四肢及身体の運動」、「怒」などの観察がつづき、「道徳感情」、「羞恥」、「言語」などの２才７か月の乳幼児の観察記録をもって終わる。ダーウィンによる乳幼児観察の記述内容は、現代の乳幼児心理学から見てもレベルは高い。

ダーウィンの児童記録を訳出（摘録）するにあたって倉橋は、かつて「プライエル氏の著書に対するブラウン氏の摘録が吾人児童研究者のために多大の便益たるは人の知るところなり。余のダービン氏の児童観察（「マインド」第２巻第７号所載）の摘録も・・・幾分の便益を我が同好の前に供しえば幸なり」と前文に書き、翻訳抄録への意気込みと、児童研究上の意義を述べている。

1909年を頂点とする前後の４年間、倉橋は『児童研究』誌上において、海外の最新の心理学を中心とした雑誌からの多数の翻訳紹介をものする。量的には心理学雑誌からの翻訳が多いが、教育学に関連する雑誌や論文への目配りもうかがわれる。この活動を通して心理学のみならず、幼児教育学への目も開かれてくる。

５月10日、倉橋は日本児童研究会総会において「児童と詩」と題する演説の場を与えられる。これは彼自身の手になる高等２年級の生徒についての心理学的な実験の報告である。この時期、倉橋はまだ心理学的な研究を中心としているのである。

５月11日開催予定の日本児童研究会総会案内記事の中に、２２人の演説者の一人として、倉橋の名前が見える。題は「児童と宗教」を予定している。まだ以前として『児童研究』が彼の活動の舞台なのである。

７月25日、倉橋は『児童研究』に「家庭における児童研究法」を連載しはじめる。心理学的な手法に依拠しながら、育児にあたる一般の婦人のための「幼児の観察の要点と記録の仕方」を説くのである。

６．『児童研究』から『婦人と子ども』へ――幼児教育学研究への傾斜

みずから志願した兵役から復帰した倉橋は、再び研究生活に戻ることになる。恩師、元良勇次郎が会長を務める日本児童研究会および『児童研究』誌を中心とした活動が始まる。1908(明治41)年３月のことである。それから２年後の1910（明治43）年５月には東京女子高等師範学校の講師となり、児童心理学を講ずる立場となる。これを機に『婦人と子ども』を舞台とした活躍が主流となる。新進気鋭の研究者の「颯爽たる出発」（注21）である。これは同時に倉橋の幼児教育学および保育実践界への華やかなデビューであり、これから終戦後にまで継続する『婦人と子ども』（後に『幼児の教育』）の推進者および指導者としての長期にわたる活動の出発点である。

それでは、「森の幼稚園」にいたるまで、彼の活躍の場は、どのような過程を経て『児童研究』から『婦人と子ども』へと移行するのか。

このことをまずは形の上で明らかにするために、『児童研究』に関連する倉橋の活動と、『婦人と子ども』に関連する倉橋の活動の対比を以下に試みた。

つぎに列挙する倉橋の活動のうち、たとえば左の欄に「２月、翻訳「幼児嫉妬心の新解釈」(12-8)」とあるのは、『児童研究』誌に発表されたのが２月であり、「幼児嫉妬心の新解釈」と題する翻訳であることを示す。なお翻訳の中には、抄訳や「適録」（翻訳の要点をまとめたもの）も含め

る。鍵括弧だけの表示は倉橋による論文ないしは著述である。「(12-8)」の数字は各雑誌の巻と号を示し、この場合『児童研究』の「第12巻第８号」であることを示す。

『児童研究』に関連する倉橋の活動	『婦人と子ども』に関連する倉橋の活動
●1907（明治40）年、倉橋24歳。 ７月、日本児童研究会規則の中に幹事の一人として倉橋の名前が見える。(10-7) しかし、この年に倉橋による著述は見えない。	
●1908（明治41）年、倉橋25歳。 ３月、日本児童研究会月次小集会の会告中で、４月２日の倉橋の講演「児童の絵画に就て」が予告される。(11-3) ３月、翻訳「心的改造期の研究」(11-3) 翻訳「ダービン氏の児童観察」、３・４・５号に連載。(11-3･4･5) ４月、「児童の絵画に就て」、４・５に連載。(11-4･5) ４月、日本児童研究会総会(5/11･12) の予告中講演「児童と宗教」を予定。(11-4) ４月、翻訳「ポーランド児童に於ける人形の研究」(11-4) ４月、翻訳「児童に於ける精神沈鬱」(11-4) 5/10、日本児童研究会総会において倉橋「児童と詩」と題して演説。 ５月、翻訳「教育心理学の新任務」(11-5) ６月、翻訳「児童の分類」(11-6) ７月、翻訳「腺状殖生」(12-1) ７月、「家庭に於ける児童研究法」、７・８・９号に連載。(12-1･2･3) ８月、翻訳「顔面画認識ノ実験」(12-2) ８月、翻訳「誠実ノ発生的研究」(12-2)	
●1909（明治42）年、倉橋26歳。 ２月、翻訳「幼児嫉妬心ノ新解釈」(12-8) ２月、翻訳「教育上ヨリ観タル競争心」(12-8) ３月、翻訳「疲労ノ実験ニ就テ」(12-9) 3/31、日本児童研究会総会における学術演説	３月、雑録中、3/31の日本児童研究会総会記事あり。「児童と文学　文学士　倉橋

「児童と文学」(12-10)、『婦人と子ども』(9-4) にも同じ記事が見える。

4月、翻訳「学課ノ好悪ニ就テ」(12-10)

4月、翻訳「児童画研究ノ趨勢」(12-10)

4月、翻訳「記憶法ニ就テ」(12-10)

5/8、心理学通俗講話会講演「小供の虚言」

5月、翻訳「幼児ニ於ケル「我」ト言フ言葉ノ使用」(12-11)

5月、翻訳「暗示的質問ノ作用」(12-11)

5月、「小児画家ヨシュア、レイノルド」(12-11・12)

6月、翻訳「四十七乃至四十八ケ月ニ於ケル物ノ意味及定義」(12-12)

6月、翻訳「児童ノ学習ニ就テ」(12-12)

11/6、第5回通俗心理学講話会講話「子どものあそび」(13-4)

11月、「ダービント児童研究」(13-5)

11月、翻訳「野蛮人ト児童トノ差異」(13-5)

12月、翻訳「低能児教育実例」(13-6)

12月、翻訳「教室の温度の生徒の作業に及ぼす影響」(13-6・7)

●1910（明治43）年、倉橋27歳。

1月、翻訳「幼児の色覚」(13-7)

2月、翻訳「学童ノ視聴障害ニ就テ」(13-8)

2/1、日本児童研究会第1回講話会「小児の遊戯」（事前の案内では「子供の遊び」）(13-8)

2/12、第8回心理学通俗講話会講話「子どもの臆病」(13-7)

3月、2/1講話の記録「児童ノ遊戯ニ就テ」(13-9・10・12)

3月、翻訳「小学児童ノ色彩ニ対スル好悪ノ研究」(13-9)

3月、翻訳「児童の禀賦ニ関スル理論的及実際的問題」(13-9)

4月、翻訳「小学児童と睡眠」(13-10・11)

11/19、日本児童研究会第3回講話会
講話「社会的児童問題」(14-6・8)

●1911（明治44）年、倉橋28歳。

惣三君」との紹介が見える。(9-4)

7月、「子どもの虚言」(9-4)『婦人と子ども』における倉橋の最初の署名入り論文。

9月、「まず児童研究に連載せられたる文学士倉橋惣三氏の個性観察法を読まれんことを勧める」との記事が見える。

1月、前年12月、東京で玩具展覧会が開かれる。取材記事の中で「文学士倉橋惣三氏の談話」として「大道玩具の改良」が引用される。(10-1)
「子供と活動写真」(10-1)

2月、「大人と子ども」(10-2)

3月、「子どもの臆病」(10-3)

5/11、東京女子高等師範学校講師となる。

7月、「子どもの想像」、冒頭に倉橋のフレーベル会入会の言葉がある。(10-7)

8月、「児童の遊戯に就て」(18-8・9)、日本児童研究会での講話を収録。

12月、倉橋『婦人と子ども』編集主幹に加えられる。(11-1)

1/12、演説概要「『イマジナリーコンパニオン』に於て(ママ)」(14-7)
3月、日本児童研究会第6回総会、宿題報告「児童ノ読ミ物」(14-10)
5月、「幼稚園児童の弁当」(14-11)
6/1、日本児童研究会例会講演「幼稚園児童ノ弁当」(14-11)
7月、「心理学的臨床ニ就テ」(15-1)
7月、日本児童研究会における児童食料調査、倉橋テーマ「児童間食（飲料等をも含む）」(15-1)
このころ倉橋、日本玩具研究会の評議員となる(15-2)
11/22、心理学通俗講話会「感情ト教育」(15-4)
11/23、日本児童研究会秋季総会、児童学講演「児童ノ知識」(15-6)
従来の心理学通俗講話会が拡大して心理学研究会となり、倉橋、幹事となる。(15-5)

●1912（明治45）年、倉橋29歳。
この年6月までの『児童研究』には倉橋の執筆になるものは見られない。

1月、「机辺だより」を担当。
「クラーク大学の児童研究事業」、「タンネル氏の「保育上の三注意」」「パルマー氏の保育法の基礎としての発達の原理」の3編を紹介。(11-1)
2月、机辺だより
「心理学の参考書に就て」、「ピー、エス、ヒル氏『幼稚園の唱歌』」(11-2)
4月、「外へ外へ」「途上だより」(11-4)
5月、「児童の弁当」(11-5)
6月、「今月二十一日」(1-6)
「子供の自重心」(11-6･7)
7月、フレーベル会幼児教育講習会「幼児教育の原理としての児童心理学」）、『児童研究』(14-12) 雑録中。

8月、机辺だより「幼稚園の改良(ｽﾀﾝﾚｰ･ﾎｰﾙ氏)」(11-8･10･11)
「子供の友一茶」(11-8)
9月、「児童の模倣に就て」、「幼児預所に就て」、「機嫌のよしあし」(11-9)
11月、翻訳紹介「人形の研究（サリー氏）」(11-12)

1～6月、「新らしみ」、「森の幼稚園」の連載始まる。
2月、「子どものしもべ」、机辺だより「話の仕方（ブライアント氏）」(12-2)
3月、「真に子供のため」、机辺だより「人形遊びの実験（グルチンスカ女史）」(12-3)
4月、「春風」、「モンテッソリの教育」、机辺だより「幼稚園の教育（スタンレーホール氏）」(12-4)
5月、「ころもがえ」、「フレーベル主義と婦人」(12-5)、
6月、「フレーベル主義新釈」、「きかぬ子」、「清水行」(12-6)、
講演「幼児保育の新目標」、京阪神三市連合保育会総会。

上記左欄の『児童研究』における執筆状況からも明らかとなるように、倉橋の『児童研究』を舞台とした活動は1908（明治41）年から精力的に始まる。とりわけ初めの３年間は、海外の心理学関係の雑誌を中心とした翻訳紹介である。それも抄訳で、中には雑誌１ページにも満たないものもある。

その活動は1908（明治41）年からの３年間に集中する。上記の『児童研究』誌中、原著者が明記してある翻訳、または海外文献を参考にした旨を明記してある著述は全部で29編である。そのうち、出典が明らかとなるのは25編である。倉橋自身が『子供讃歌』の中で回想しているように、彼は東大の図書館で児童心理研究のために「ペヂ・ゼム(Pedagogical Seminary)」を読んでいたのであった。『児童研究』における翻訳紹介の出典も、おのずと "Pedagogical Seminary" が中心となる。

全25編の出典は次の雑誌である。

○　Pedagogical Seminary.　８編。
○　Psychological Bulletine. 3 編。
○　Zeitschrift der Angewandte Psychologie und Psychologische Sammelforschung. 2 編。
○　The Psychological Review. 2 編。
○　The Psychological Clinic. 2 編。
○　American Journal of Psychology. 2 編。
○　The Journal of Educational Psychology. 1 編。
○　The British Journal of Psychology. 1 編。
○　Psychological Review. 1 編。
○　Neue Bahnen. 1 編。
○　Mind. 1 編。
○　Educational Review. 1 編。

以上のように、倉橋の翻訳した内容そのものと、関心を寄せた雑誌名からも、彼の研究関心が「心理学」に寄っていたことがうかがえる。また、1909（明治42）年７月の「日本児童研究会現在役員」によれば、倉橋は「幹事」をつとめると同時に、高嶋平三郎・塚原政次・松本幸次郎とともに「児童心理学委員」を会長より嘱託されている。「教育学委員」ではないのである。

次に、1907年から1912年６月までの『児童研究』と『婦人と子ども』に関連した倉橋の著述、講演、翻訳などの活動を、それぞれの１回分を１として換算して、各年ごとに集計してみると次のようになる。

	『児童研究』関係	『婦人と子ども』関係	合計
1907（明治40）年	0	0	0
1908（明治41）年	１６	0	１６
1909（明治42）年	１９	1	２０
1910（明治43）年	１３	7	２０
1911（明治44）年	7	２０	２７
1912（明治45）年６月まで	0	２０	２０
総　　計	５５	４８	１０３

上の２つの表から、倉橋の『児童研究』を舞台とした海外の心理学雑誌の翻訳紹介活動が1908（明治41）年から精力的に始まることが明らかとなる。ついで1909（明治42）年にはそれが頂点に達している。1908年からの５年間のうちに活躍の場が徐々に『児童研究』から『婦人と子ども』に移ることも明らかとなる。

そして1910年から1911年にかけて、活動の場は『児童研究』から『婦人と子ども』へと逆転するのである。『婦人と子ども』誌上においても、初めのうちは児童心理学的な内容であった。しかし、1912（明治45）年に始まる「森の幼稚園」は一転して教育小説の形式をとって、心理学的な内容は払拭されたように消えてしまう。さらに「森の幼稚園」の連載と平行しながら発表された諸論文、たとえば「真に子供のため」、「モンテッソリの教育」、「幼稚園の教育（スタンレーホール氏）」、「フレーベル主義と婦人」、「フレーベル主義新釈」などは純粋に幼児教育学的内容であるといってよい。「森の幼稚園」の執筆と歩みをともにしながら、倉橋は幼児教育学へと傾斜を深めていくのである。その意味で作品「森の幼稚園」と講演「幼児保育の新目標」とは、明治末の時点における倉橋の初期幼児教育学的思想の原点であり、のちに展開される幼児教育理論、とりわけ幼児教育方法論の出発点であることが明らかとなる。

以上が倉橋の『児童研究』と『婦人と子ども』に関連する諸活動から見た幼児の心理学的研究から幼児教育学への移行過程である。

７．『婦人と子ども』における倉橋の幼児教育研究

1908（明治41）年、『児童研究』での活躍が始まる年の７月、『婦人と子ども』に最初の倉橋の署名入り論文が姿を現す。題は「子供の虚言」である。これは通俗心理学講話会における演説の大要である。

「昔から嘘八百と称え虚言の数を制限されたが、今これを心理学上から研究しさらに実地に就いて説明を下すと子供の虚言を吐く場合を１３の項目に分類する事が出来る。」

倉橋も書いているように、この論文は、子どもの嘘を「心理学上」から研究し、さらに「実地に」説明したものであるが、倉橋の説明は具体的で鮮やかである。倉橋の文章による語りかけは、講演と同じように滑らかで、歯切れの良いリズムがある。

1910（明治43）年５月11日付で東京女子高等師範学校の講師に任ぜられ「児童心理学」を講義しはじめる。このあたりから「子どもの遊戯に就て」や「幼稚園児童の弁当」などのような幼児教育を志向する研究成果も世に問われはじめる。

倉橋は、これを機に附属幼稚園の書庫にこもって明治初年からの保育文献に親しむようになる。倉橋の語るところによれば、その中には桑田訳『幼稚園』、関信三訳『幼稚園記』、同『幼稚園法二十遊戯』、かつての日本最初の保母、豊田芙雄らの手記なども含まれていた。日本の幼児教育の遺産への接近は、必然的にフレーベル原典への接近を呼び起こす。(注22)

東京女子高等師範学校講師に就任した直後の倉橋の論文「子どもの想像」の冒頭には「今回私は当フレーベル会々員の一人に加えて頂きまして、皆様と共に幼児の為につくしまた研究することの出来ますのを仕合に存じます」との挨拶が見える。『婦人と子ども』への登場は、やはり東京女子高等師範学校講師への就任が直接的な契機である。しかし、その附属幼稚園は、かつて彼が一高の学生のときにも、帝大の学生のときにも出入りし慣れ親しんだ、あの幼稚園である。

この年の12月10日、フレーベル会常集会が開かれる。倉橋は新任の幹事となり、和田實と共に、『婦人と子ども』の「編輯」を担当する。堰を切ったように倉橋の筆になる論述が『婦人と子ど

も』に溢れることになる。

さっそく翌1911（明治44）年の第１号より「机辺だより」という、いわば編集者の「机辺」から読者へ向けての「たより」の欄を新設し、その場での倉橋の自在の活躍が始まる。編集幹事への就任直後の第１回目の「机辺だより」は、倉橋による翻訳抄出の「クラーク大学の児童研究事業」、「タンネル氏の「保育上の三注意」」、「パルマー氏の保育法の基礎としての発達の原理」の３編であった。（注23）とくに最初の「クラーク大学の児童研究事業」は、スタンレー・ホールが総長を務めるクラーク大学の児童研究を進めるための組織の紹介である。

この年の『婦人と子ども』第４号において、巻頭を飾る「外へ外へ」と、「途上だより」を執筆する。「外へ外へ」は、「春風が誘いに来る。蝶々が迎えに来る。若草は褥を布いて、花は美しき笑みをたたえて、野も山も子どもの外遊を待ち設けている」という文で始まる。子どもの精神の真の発達のために、倉橋が要求するのは、「広い自由な遊び場」と「新鮮な空気」と「十分な日光」である。この三つを「三宝」とも表現している。だからこそ「外へ外へ」と保育者たちに呼びかけるのである。これも自然の中の「森の幼稚園」を彷彿とさせる表現であり、また「幼児保育の新目標」での主張となる思想である。

さらに次のように続ける。

「子どもの自己活動の最も正常な又最も適当な資料として自然の如くいいものはない。理屈なく教え、教えずして活動せしむるもの、自然に如くものはない。・・・世に子どもに最も適当な玩具として、自然玩具の如く適当なものはない。天の与えた自然を、天の与えた自己活動によって楽しむのが、自然玩具の第一である。」(注24)

ここには、教育者あるいは保育者が子どもたちに何かを教えるのではない。そうではなくて教師と子どもとの間に存在する中間項としての「自然の事物」が、子どもたちの自己活動を引き起こさずにはおかないという、間接的教育論の萌芽さえもうかがえる。それはもちろん、「天の与えた自然」の事物を、これまた「天の与えた子どもの自己活動」を通して楽しむというのであるから、「万物の中には神性が働いている」とするフレーベルの教育哲学が根底に横たわっている。

倉橋の「外へ外へ」の主張はさらにつづく。「子どもに自然に接せしめよというは、言うまでもなく花見遊散(ママ)の意味ではない。また必ずしも名勝見物の意味でもない。もっと真面目に、もっと謙遜に、自然の表面の美を楽しむばかりでなく、自然そのものの真率な感化を得させよという意味である。」(注25) だから、彼に言わせれば「草のあるところ、日の当たるところ、すなわち皆よろし」となる。

同じ号の「途上だより」は、文字通り倉橋の通勤途上で見かけた「子どもの情景」を描写したものである。泣く子に菓子を与える尼のこと、10歳ばかりの男の子と父親の隠れんぼ、子ども好きの博士のことなど、子どもをめぐる微笑ましい話が童話（メルヒェン）のように倉橋の筆で活写される。

同年『婦人と子ども』５号中の「児童の弁当」は、「幼稚園児童の弁当」と題して『児童研究』において発表されたものであり、同じテーマで日本児童研究会例会において講演もされている。いわば『児童研究』から『婦人と子ども』への懸け橋となる仕事のひとつである。同じような過程をたどる論文としては、「子どもの虚言」、「子どもの臆病」、「児童の遊戯に就て」などがある。

倉橋は、編集担当幹事に就任早々、「机辺だより」において海外の保育理論を紹介した。つづいて、この年の『婦人と子ども』第８号ではスタンレー・ホールの「幼稚園の改良」を紹介する。この論文は「十年程前のもので新しいものではありません。しかしその堂々たる所論は今なお我が国

の幼稚園のために」参考になると信じ、紹介を始めるのである。この「幼稚園の改良（スタンレーホール氏）」は、第10、11につづき、全部で２０ページにわたる。一言でいえば、スタンレー・ホールによるフレーベル教育批判の論文である。

「フレーベルは児童が自然物のためにその精神を眩惑せられ、注意を擾乱せられるのを恐れて恩物という第三者を採用したことは今日からこれを観て賛成することが出来ない」とする。その理由は、「第一児童の精神は彼の考えたように深い眠りから突然覚めて、俄かに自然物のために惑乱せられるというようなものではないのであります。まだ複雑な経験を受け容れるだけの素地がない」（注26）からである。

さらにスタンレー・ホールは、恩物をもちいたフレーベルの教育方法を誤りとする。

「自然物と直接に接触するということを除いては児童の精神を開発することは甚だ困難である。自然物に接触することを避けさせて、符号や模型で教育しようとするのはその方法を誤っている。石や木や水や山を直接に観、直接に接することが最も必要である。実物教授は幼児にとって極めて大切なのであります。」(注27)

スタンレー・ホールは、幼稚園の教育は「本能的活動」の上に建てられるべきであると主張する。心理学研究からの帰結である。「本能的活動」として彼が挙げるのは、ｲ.言語の本能、ﾛ.好奇心・知識の本能、ﾊ.遊戯本能、ﾆ.美的本能、ﾎ.社会的本能、ﾍ.獲得と所有、ﾄ.数の本能、ﾁ.話の本能の８つである。それは、あたかも植物が適当な境遇に置かれると芽を出し、葉を出し、花を開き、実を結ぶのと同じように、幼児も適当な境遇のもとに置かれるならば「完全な発達」を遂げるだけの「潜勢力」、つまり本能を備えているというのである。

だから幼児の教育に必要となるのは、「なるべく広い野原に遊ばせ、清潔の空気を呼吸し、自由に、愉快に、活発に遊ばせること」である。

この主張は、倉橋の講演「幼児保育の新目標」の結論でもある。

『婦人と子ども』の1912（明治45）年第１号は、装いも新たにスタートする。表紙はスエーデンの画家ラルソンのエッチングが飾り、本文では菅原教造による「小児画家ラルソンの話」が延々31ページにわたって展開する。倉橋の好みによる大胆な編集上の変革である。

巻頭言は倉橋による随筆風の「新らしみ」である。その中で倉橋は「新らしみは外になく内にある。物になく心にある」と書き出す。「陳（ふ）り易く、滞り易き我ら（大人、筆者注）の心を奮い起して、子供と共に常に、心の新しき人でなくてはならぬ」と説く。そして、その号の最後を飾るのが、倉橋による作品「森の幼稚園（一）」なのである。

４月21日、例年のようにフレーベル会総会が開かれる。当日は大瀬甚太郎の「フレーベルに就て」のほかに、小河法学博士の演説も予定されていた。しかし、欠席のため、急遽、倉橋がこれに代わって「フレーベル主義と婦人」と題する講演をすることになる。すでにかつての児童心理学者の倉橋ではなくて、フレーベル教育学を語る倉橋に変わっているのである。この日の経緯はフレーベル会機関誌『婦人と子ども』ばかりではなく、『児童研究』にも報告されている。

連載「森の幼稚園」の最終回は1912（明治45）年の６月５日の発行の『婦人と子ども』第６号に掲載される。この号には、「森の幼稚園（六）」のほかに、倉橋の執筆になる「フレーベル主義新釈」、「きかぬ子」、「清水行」の３編も収録されている。いずれの内容も、もはや児童心理学の内容とは言いがたい。幼児教育学の内容そのものである。

また、この『婦人と子ども』第６号の本文は全部で52ページであるが、この号に執筆された倉橋の上記４編の合計は26ページにも及ぶ。じつに１冊の雑誌の半分は、編集者でもある倉橋による執

筆なのである。すでにこの時期において『婦人と子ども』は、文字通りの倉橋の活躍の舞台となっているのである。

同じ６月２日には、京阪神三市連合保育会の第１９回総会が神戸で開される。その席上、倉橋は「幼児保育の新目標」と題して講演をする。８月には、フレーベル会主催の幼児教育講習において、倉橋は10時間にわたって「幼児教育原論」を講じることになる。心理学から、幼児教育へと急角度で傾斜を深めていく倉橋である。

以上のように倉橋の幼児教育方法論の生成過程において、「森の幼稚園」は重要な位置を占める作品である。このつぎの私の課題は「森の幼稚園」における幼児教育方法論としての「間接教育」論の展開と、それにつづく「間接教育」論の形成過程の検討にある。

８．謝辞

本論は文部省派遣の内地研究(92.5.1-93.2.28.広島大学教育学部教育方法学研究室）の最初の仕事となった。この願ってもない貴重な機会をいただいたばかりか、多大の助力を惜しまれなかった山口大学教育学部および広島大学教育学部の関係の方々に、記して心よりの感謝を申し上げる。

【注】

1）『倉橋惣三選集・第４巻』、フレーベル館、昭和40年、342ページ。
2）倉橋「森の幼稚園（一～五）」、『復刻幼児の教育』第12巻第１～５号。以下同じ。
3）「発刊の辞」、『児童研究（復刻版）』第１巻、昭和54年。
4）倉橋「子供讃歌」、『復刻幼児の教育』第48巻第９号、25ページ。
5）倉橋「子供讃歌」、『復刻幼児の教育』第48巻第９号、24-25ページ。
6）倉橋「子供讃歌（四）」、『復刻幼児の教育』第48巻第12号、26ページ。
7）倉橋「子供讃歌」、『復刻幼児教育』第48巻第９号、28ページ。
8）倉橋「子供讃歌（四）」『復刻幼児教育』第48巻第12号、27ページ。
9）「元良博士の小伝」、『児童研究』第１巻第３号、42ページ。
10）『東京帝国大学五十年史・上冊』昭和７年、1322ｵﾖﾋﾞ 1326ページ。
　『東京大学百年史・資料三』昭和61年、141ページ。
11）倉橋「子供讃歌」、『復刻幼児教育』第48巻第９号、25ページ。
12）同上26ページ。
13）同上27ページ。
14）同上27･28ページ。
15）倉橋「子供讃歌（四）」、『復刻幼児の教育』第48巻第12号、28･29ページ。
16）『児童研究』第１０巻第７号の巻末「日本児童研究会規則」中。
17）『児童研究』第１１巻第３号中。
18）『児童研究』第11巻第４・５号中。
19）『児童研究』第11巻第３・４・５号中。
20）倉橋「ダービント児童研究」、『児童研究』第13巻第５号、153-156ページ。
21）坂元彦太郎著『倉橋惣三・その人と思想』昭和51年、フレーベル館、30ページ。
22）倉橋「子供讃歌（六）」、『復刻幼児の教育』第49巻第３号、25ページ。

23）『婦人と子ども』第１１巻第１号、37-43ページ。
24）「外へ外へ（三）」、『婦人と子ども』第１１巻第４号、20ページ。
25）「外へ外へ（四）」、『婦人と子ども』第１１巻第４号、26ページ。
26）倉橋「幼稚園の改良（スタンレー・ホール氏）」、『婦人と子ども』第11巻第８号、33ページ。
27）倉橋「幼稚園の改良（三）（スタンレー・ホール氏）」、『婦人と子ども』第11巻第11号、48ページ。